



# Kazé



ルヴァン便りNo.1

2009.4.25

小雨の降ったあと見る春の樹木の風景は美しい。

ぼくはいつも夕方、散歩に出る。

神宮外苑や新宿御苑の木立の中を歩いていると、小鳥たちの群れに出会う。うれしそうに空中を舞う小鳥たちを見て羨ましく思う。

なんて自由に空中で遊んでいるのだろう！平凡な日常生活で固まった感性も、こんなに自由になりたいと思う。

ルヴァン美術館を皆で創ったとき、常識的で普通な美術館ではなく、ちょっと違った美術館にしたいと思った。真面目で堅い美術館でなく、空中で遊ぶ小鳥たちのように自由に自然な……。企画として展示するものも偉大な名作でなく、野の花のような、我々の身近な美を見つけて楽しめるものがよい。

身近の美といってもそれは軽い、浅い美でなくて、ささやかなものにも深く、偉大な美があることを示したい。

思えば江戸時代の浮世絵版画は庶民のための小芸術であった。生活を楽しくするだけの身近なものであった。

だいぶ以前の話であるが、当時のオリンピックの委員長にブランデーという人がいて、日本に仕事のため来ていた。仕事の合間の一日、係りの人が案内をしに迎えにきた。

その日は雨だったので「あいにくの天気で」と係りの人が言ったら、ブランデーは「でも広重は雨が好きだったんでしょ？」と言った。この会話が朝日新聞の天声人語に載っていた。

広重だけではない。春信も他の画家も雨を面白いモチーフと見ていた。

小娘が華奢な白い足を出して傘を傾けている絵……。これは西洋であまりない美である。日本の日常生活から生れた美である。ぼくは作った美よりも、自然に生まれた美の方が好きである。

さて、こんな文を書いているのも、実は美術館と皆さんとのつながりをつけるものとして、季刊誌のようなものを作るから、それに書いてくれと頼まれたからである。

それは年に1、2回発行する。名称はルヴァン便りとか、簡単に「Kazé」とか……。

しなくてもいいことを為るのが文化だとぼくは思っているのだが、遊びや人々の交流の喜びなくては人生は面白くないのではないだろうか……。

皆さんと楽しみましょう。多少、面倒ではあるが……。それも、セ・ラ・ヴィということで……。

西村八知（ルヴァン美術館館長）



「N氏の一家」

石井柏亭画

## 西村伊作の建築を訪ねて - 江口邸（旧林桂二郎邸・倉敷市）

### 伊作と建築

文化学院の創立者として知られる西村伊作であるが、建築活動も真剣なものであった。教育と建築、彼の狙いは一つ。それは日本人の生活近代化である。

維新より数十年が経過した明治末から大正にかけて、社会の公的な部分はかなり洋風が普及していたが、人々の私的な部分は旧態依然としたものであった。欧米諸国の実情をよく知っていた伊作は、日本人の私生活、衣食住の近代化の必要性を痛感していた。

「食」の近代化は叔父で米国帰りの医師・大石誠之助が熱心に取り組んでいた。「衣」は妻・光恵にその活動を薦めた。そして自分は「住」を担当しようと考えた。さらに、我が子が成長するにつれ、日本の近代化のためには未来を担う子供らに、それまでの封建的なものでない自由な、型にはめない教育が必要だと考え、文化学院を創立したのだった。

時は大正デモクラシー。多くの人々は今後の日本人のあり方を模索していた。そんな時、伊作は日本人の住まい方、生活様式、生活の哲学を明確に示し、今風にいえば大ブレイクしたのであった。それが大正デモクラシーの一側面である。その後、日本は戦争の時代に突入するが、伊作の主張は戦後日本のプロトタイプ（祖形）となった。

### 伊作と倉敷

今回紹介する江口邸は倉敷市の郊外祐安にある。伊作は倉敷に西村建築事務所の出張所を置き、多くの建築作品を残している。

倉敷では倉紡の労働理想主義として、また大原美術館の創設者として大原孫三郎がよく知られているが、この大原は青年期から林源十郎という人物の薫陶を受けていた。林は倉紡の経営に参加するとともに倉敷教会設立に中心的な役割を果たした人物であって、林は当地で開かれた講演会や著書を通じて伊作の主張に深く共鳴していた。このことから、大正10（1921）年、現在倉敷市鶴形に残る倉敷教会会堂の建築を依頼することになる。これが倉敷と伊作の関わりの始まりである。

### 江口邸

この住宅は林源次郎の次男、桂二郎の住まいとして、田園の広がる祐安に大正12（1923）年に完成した。

桂二郎は自宅の建設について伊作につきのような書簡を送っている。「私も此際是迄の姑息な窮屈な生活の一転機を画して多年憧憬の新しい生活を実現したいと思います。新しい家の住居は多年渴望していながら今まで逡巡して果たし得ないでおります。

土地の選定にもあそこかここかとずいぶん迷います。しかし是も楽しみの一つであります。いよいよ家を建てると云う日になりましたら何れ設計やら其他の御協力を煩わしたいと思います。・・・」

この文中で「先生のお話を聞いて」とは、伊作が倉敷に招かれて行なった「文化生活の実行」と題する講演のことで、伊作は生活様式の改革を訴えたのである。

住宅は小高い山を背に南面した見晴らしのよい所に建ち、一階は南側にガラス戸で隔てられた居間と食堂がある。そして廊下をはさんで北側に台所・浴室他、さらに西に広縁が付く和室が伸びている。二階は個室三室と玄関上にバルコニーを設けている。この平面で注目すべきは、一階の南に面する洋風居間と二階の個室である。

日本の伝統的な家屋は、接客を最も重視し、家族の家庭生活は軽視されていた。それに壁が少なく個





人のプライバシーも軽んじられた。これが維新後約50年経過した明治末の日本の住宅である。大正に入りようやく接客よりも家族重視、和風よりも洋風の流れが生まれ宅史上では大正11年、南面する大きな洋風の居間を持つ住宅が誕生（成立）したとされる。だから江口邸のような間取りの住宅は時としては非常に先進的なものであった。

このような住宅が生まれたことについて誰が大きな役割を果たしたか。それは西村伊作ともう一人、帝大教授佐野利器である。その構図を簡単にいうと、伊作が大きな世論のうねりを生じさせ、その状況の中、佐野が天下に号令をかけた結果といえるだろう。

さて、外観は大屋根の妻壁を正面に見せ、全体は平滑な漆喰壁とし、それに腰壁や食堂の外壁など随所に荒々しいままの石材があしらわれ、その対比が魅力的である。この構成は倉敷教会と同様である。屋根は完成当時天然スレートが葺かれていた。実はこの祐安の山際には当時隣接して6棟の様々な住宅が建築され、その内少なくとも3棟は伊作の設計であった。林源十郎は田園の用水路から見て美しい絵のようになるよう建築することを望んだという逸話が残っている。

邸内は特に彫刻などの装飾的なものは見られず、漆喰壁と木部で構成されている。居間には石造りの暖炉が設えられている。現在お住まいの江口さんご夫妻にこの住宅で住まう感想をお聞きすると、収納が少なく、隙間風が入るなどは不満だが、暖炉はよく燃えるとのことであった。

ご夫妻は以前は横須賀に住み、ご主人は会社勤めをリタイア後、ご夫妻の縁の深い岡山倉敷に転居されたという。奥さまは茶道の先生、ご主人は教会活動ほか悠々自適の生活をされている。



江口邸を辞してから帰りの電車の発車まで少し時間があつたので、同じ伊作の設計による倉敷教会と大原美術館の裏手にある若竹の園（幼稚園）を久しぶりに訪ね、以前と変わらない姿を見ることができた。今日巡った伊作の建築は築後すでに80年近く経過しているが今なおその魅力は失われず、多くの人々に愛されているなど感じ倉敷を後にした。

田中修司（建築史家）

## 2009年度 ルヴァン美術館のご案内

7月1日(水) ~ 11月23日(月)

水曜日休館(水曜日が祝日の場合はその翌日休館日)

但し7月15日~9月15日は無休

10:00 ~ 17:00

### 企画展 「建築家坂倉準三とユリを巡る人々」

初期住宅—飯箸邸と組み立て住宅(共に軽井沢に移築)

### 常設展 「西村伊作と文化学院に携わった芸術家たち」

猪熊弦一郎・荻太郎・斎藤寿一・棟方志功・村井正誠・山口薫・脇田和

坂倉準三(1901-1969)は帝大美術史学科卒業直後の1929年、20世紀の建築の巨匠ル・コルビュジェに師事すべく渡仏。まずパリで建築の基礎を修学後、1931年念願の入門を果たしました。当時のル・コルビュジェのアトリエには彼に憧れて、世界中から集まった若者たちが無給で働いていました。その中には生涯の友となるシャロット・ペリアン、ホセ・ルイ・セルトもいました。坂倉はその後1936年迄、師の下で歴史的な設計の数々に携わることになります。一心不乱にパリを目指した若者に、情熱を上回る感性があることをル・コルビュジェは見抜いていました。坂倉のパリ万博での鮮烈なデビューの後押しをしたのも師であり、ル・コルビュジェという存在に励まされつつ、戦後の重苦しい日本の風土に爽やかな風を送り込み、独自の建築を確立していきました。1930年代のパリには日本からも多くの若者が集まっていた。当時を中心とした建築家や芸術家の仲間との交流、留学中のユリ(西村)との出会い、また今も続く彼らの家族との温かいつながりなど、一部分ではありますが、坂倉準三・ユリの人となりを展示してみました。



### 建築ツアー 飯箸邸見学会(移築、現ドメイヌ・ドゥ・ミクニ)

8月28日(金) 15:00-16:00 両日とも・現地集合  
9月28日(月) 15:00-16:00 ・参加費無料

現地:長野県北佐久郡軽井沢町追分字小田井道下46-13 Tel:0267-46-3924  
アクセス:しなの鉄道「御代田」駅よりタクシーで5分、JR「軽井沢」よりタクシー15分

### ルヴァン サマーコンサート2009

開場18:00 開演18:30(入館料・フリードリンク付)

8月15日(土)	ボサノバ / サパトス (木村純・三四郎)	3000円
8月22日(土)	第2回近藤和花ピアノコンサート(軽井沢ペット福祉協会チャリティコンサート) — 高原に響くピアノ —	2800円
9月20日(日)	海藤隆吉ピアノトリオと松野ただ子(ボーカル)(軽井沢ペット福祉協会チャリティコンサート) — 思い出のメロディをピアノにのせて— Autumn Serenade	4000円

● ツアーおよびコンサートのお申し込みはルヴァン美術館0267-46-1911へ

☆ カフェテラスCafé Le Vent、ミュージアムショップLe Ventは常時ご利用いただけます

ルヴァン美術館:〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町長倉957-10 Tel: 0267-46-1911 Fax: 0267-46-1910

東京事務所:〒107-0052 港区赤坂9-6-14 Tel & Fax: 03-3401-8896 <http://www.levent.or.jp>